

クねずみ

宮沢賢治
みやざわけんじ

1 クという名前のねずみがありました。たいへん高慢でそれにそねみ深くって、自分をねずみの仲間の一**ばん**の学者**がくしや**と**おも**っていました。ほかのねずみが何か生意気なことを言**い**うとエヘンエヘンと言**い**うのが癖**くせ**でした。

2 クねずみのうちへ、ある日**ひ**、友だちのタねずみがや**き**って来**き**ました。

3 さてタねずみはクねずみに言**い**いました。

4 「今日は、クさん。いいお天気**てんき**です。」

5 「今日**こんにち**は、クさん。いいお天気**てんき**です。」

6 「いいお天気**てんき**です。何か**なに**いいものを見**み**つけましたか。」

7 「いいえ。どうも不景気**ふけいき**ですね。どうでしょう。これからの景気**けいき**は。」

8 「さあ、あなたは**おも**う思**おも**いますか。」

9 「そうですね。しかしだんだんよくなるのじゃないでしょうか。オウベイのキンユウはしだいにヒツパクをテ**い**したそう……。」

10 「エヘン、エヘン。」いきなりクねずみが**おお**きなせきばらいを**お**しましたので、タねずみはびっくりして飛**と**びあがりました。クねずみは横**よこ**を向**む**いたまま、ひげを**ひと**つつぴんとひねって、それから口**くち**の中**なか**で、

11 「ヘイ、それから。」と言**い**いました。

12 タねずみはや**あ**つと安心**あんしん**してまたおひざに手**て**を置**お**いてすわりました。

13 クねずみもや**あ**つとまっすぐを向**む**いて言**い**いました。

14 「先**せん**ころの地震**じしん**にはおどろきましたね。」

1 「全くです。」
2 「あんな大きいのは私もはじめてですよ。」
3 「ええ、ジヨウカドウでしたねえ。シンゲンはなんでもトウケイ四十二度二分ナニ……。」
4 「エヘン、エヘン。」
5 クねずみはまたどくなりました。
6 タねずみはまた面くらいました。が、さっきほどではありませんでした。
7 クねずみはやつと気を直して言いました。
8 「天気もよくなりましたね。あなたは何かうまい仕掛けをしておきましたか。」
9 「いいえ、なんにもしておきません。しかし、今度天気が長くつづいたら、私は少し畑の方へ
10 出てみようと思うんです。」
11 「畑には何かいいことがありますか。」
12 「秋ですからとにかく何かこぼれているだろうと思います。天気さえよければいいのですが
13 ね。」
14 「どうでしょう。天気はいいでしょうか。」
15 「そうですね、新聞に出ていましたが、オキナワレットウにハッセイしたテイキアツは次第に
16 ホクホクセイのほうヘシンコウ……。」
17 「エヘン、エヘン。」クねずみはまたいやなせきばらいをやりましたので、タねずみはこんど
18 というこんどはすっかりびっくりして半分立ちあがって、ぶるぶるふるえて目をパチパチさせ

1
て、黙^{だま}りこんでしまいました。

1 クねずみは横よこの方ほうを向むいて、おひげをひっぱりながら、横目よこめでクねずみの顔かおを見みていました
2 が、ずうっとしばらくたってから、あらんかぎり声こえをひくくして、
3 「へい。そして。」と言いいました。ところがクねずみはもうすっかりこわくなって物ものが言いえませ
4 んでしたから、にわかひとに一つていねいにおじぎをしました。そしてまるで細ほそいかすれた声こえで、
5 「さよなら。」と言いってクねずみのおうちを出でて行いきました。
6 クねずみは、そこであおむけにねころんで、
7 「ねずみ競争新聞きょうそうしんぶん」を手てにとってひろげながら、
8 「ヘッ。タなどはなっていないんだ。」とひとりごとを言いいました。
9 さて、「ねずみ競争新聞きょうそうしんぶん」というのじつは実じつにいい新聞しんぶんです。これを読よむと、ねずみ仲間なかまの競争きょうそうの
10 ことはなんでもわかるのでした。ペねずみが、たくさんとうろこしのつぶをぬすみためて、
11 大砂糖だいさとう持ちのペねずみと意地いじばりの競争きょうそうをしていることでも、ハねずみヒねずみフねずみの三
12 匹ひきのむすめねずみが学問がくもんの競争きょうそうをややって、比例ひれいの問題もんだいまで来きたとき、とうとう三匹びきとも頭あたまがペ
13 チンと裂さけたことでも、なんでもすっかり出でているのでした。
14 さあ、さあ、みなさん。失礼しつれいですが、クねずみのきょうの新聞しんぶんを読よむのを、お聞ききなさい。
15 「ええと、カマジン国くにの飛行機ひこうき、プハラを襲おそうと。なるほどえらいね。これはたいへんだ。ま
16 あしかし、ここまでは来こないから大丈夫だいじょうぶだ。ええと、ツエねずみの行ゆくえ不明ふめい。ツエねずみと
17 いうのはあの意地いじわるだな。こいつはおもしろい。
18 天井裏街一番地てんじょうらまちばんち、ツエ氏は昨夜さくや行ゆくえ不明ふめいとなりたり。本社ほんしゃのいちはやく探知たんちするところ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 によればツエ氏は数日前よりはりがねせい、ねずみとり氏と交際を結びおりしが一昨夜に至りて両氏の間に多少感情の衝突ありたるもののごとし。台所街四番地ネ氏の談によれば昨夜もツエ氏は、はりがねせい、ねずみとり氏を訪問したるのごとし、と。なお床下通り二十九番地ポ氏は、昨夜深更より今朝にかけて、ツエ氏並びにはりがねせい、ねずみとり氏の激しき争論、時に格闘の声を聞きたりと。以上を総合するに、本事件には、はりがねせい、ねずみとり氏、最も深き関係を有するがごとし。本社はさらに深く事件の真相を探知の上、大いにはりがねせい、ねずみとり氏に筆誅を加えんと欲す。とははは、ふん、これはもう疑いもない。ツエのやつめ、ねずみとりに食われたんだ。おもしろい。そのつぎはと。なんだ、ええと、新任ねずみ会議員テ氏。エヘン、エヘン。エン。エッヘン。ヴェイヴェイ。なんだちくしょう。テなどがねずみ会議員だなんて。えい、おもしろくない。おれでもすればいいんだ。えい。おもしろくもない、散歩に出よう。」

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 そこでクねずみは散歩に出ました。そしてプンプンおこりながら、天井裏街の方へ行く途中
 で、二匹のむかでが親孝行の蜘蛛の話をしているのを聞きました。
 「ほんとうにね、そうはできないもんだよ。」
 「ええ、ええ、全くですよ。それにあの子は、自分もどこかからだが悪いんですよ。それだの
 にね、朝は二時ごろから起きて薬を飲ませたり、おかゆをたいてやったり、夜だって寝るのは
 いつもおそいでしょう。たいてい三時ごろでしよう。ほんとうにからだがやすまるってない
 でしょう。感心ですねえ。」
 「ほんとうにあんな心がけのいい子は今ごろあり……。」
 「エヘン、エヘン。」と、いきなりクねずみはどなって、おひげを横の方へひっぱりました。
 むかではびっくりして、はなしもなにもそこそこに別れて逃げて行ってしまいました。
 クねずみはそれからだんだん天井裏街の方へのぼって行きました。天井裏街のガランとし
 た広い通りでは、ねずみ会議員のテねずみがもう一匹きのねずみとはなしていました。
 クねずみはこわれたちり取りのかげで立ちぎきをしておりました。
 テねずみが、
 「それで、その、わたしの考えではね、どうしてもこれは、その、共同一致、団結、和睦の、
 セイシンで、やらんと、いかなね。」と言いました。
 クねずみは、
 「エヘン、エヘン。」と聞こえないようにせきばらいをしました。相手のねずみは、「へい。」

1 と言いって考かんえているようです。

2 テねずみははなしをつづけました。

3 「もしそうでないとすると、つまりその、世界せかいのシンポハッタツ、カイゼンカイリヨウがその

4 つまりテイタイするね。」

5 「エン、エン、エイ、エイ。」クねずみはまたひくくせきばらいをしました。

6 相あ手のねずみは、「へい。」と言いって考かんえています。

7 「そこで、その、世界文明せかいぶんめいのシンポハッタツ、カイリヨウカイゼンがテイタイすると、政治せいじはも

8 ちろんケイザイ、ノウギョウ、ジツギョウ、コウギョウ、キョウイク、ビジュツそれからチヨ

9 ウコク、カイガ、それからブンガク、シバイ、ええと、エンゲキ、ゲイジュツ、ゴラク、その

10 ほかタイイクなどが、ハッハッハ、たいへんそのどうもわるくなるね。」テねずみはむつかし

11 いことをあまりたくさん言いったので、もう愉快ゆかいでたまらないようでした。クねずみはそれがま

12 たむやみにしゃくにさわって、「エン、エン。」と聞きこえないように、そしてできるだけ高たかくせ

13 きばらいをやって、にぎりこぶしをかためました。

14 相あ手のねずみはやはり「へい。」と言いっております。

15 テねずみはまたはじめました。

16 「そこでそのケイザイやゴラクが悪わるくなるというと、不平ふへいを生しょうじてブンレッツを起おこすというケツ

17 カにホウチャクするね。そうなるのは実じつにそのわれわれのシンガイでフホンイであるから、や

18 はりその、ものごとは共同一致団結和睦きょういっしだんけつわぼくのセイシンでやらんといかんね。」

1 クねずみはあんまりテねずみのことばが立派で、議論がうまくできているのがしゃくにさわつ
 2 て、とうとうあらんかぎり、
 3 「エヘン、エヘン。」とやってしまいました。するとテねずみはぶるるとふるえて、目を閉じ
 4 て、小さく小さくちぢまりましたが、だんだんそろりそろりと延びて、そおと目をあいて、
 5 それから大声で叫びました。
 6 「こいつは、ブンレッツだぞ。ブンレッツ者だ。しばれ、しばれ。」と叫びました。すると相手の
 7 ねずみは、まるでつぶてのようにクねずみに飛びかかってねずみの捕り縄を出して、クルクル
 8 しばってしまいました。
 9 クねずみはくやくしてくやくしてなみだが出ましたが、どうしてもかないそうがありませんで
 10 したから、しばらくじっとしておりました。するとテねずみは紙切れを出してするするするっ
 11 と何か書いて捕り手のねずみに渡しました。
 12 捕り手のねずみは、しばらくしてごろごろがっているクねずみの前に来て、すてきにおご
 13 そかな声でそれを読みはじめました。
 14 「クねずみはブンレッツ者によりて、みんなの前にて暗殺すべし。」クねずみは声をあげてチュ
 15 ウチュウ泣きました。
 16 「さあ、ブンレッツ者。あるけ、早く。」と、捕り手のねずみは言いました。さあ、そこでクね
 17 ずみはすっかり恐れ入ってしおしおと立ちあがりました。あっちからもこっちからもねずみが
 18 みんな集まって来て、

1 「どうもいい気味だね。いつでもエヘンエヘンと言ってばかりいたやつなんだ。」
2 「やっぱり分裂していったんだ。」
3 「あいつが死んだらほんとうにせいせいするだろうね。」というような声ばかりです。
4 捕り手のねずみは、いよいよ白いすきをかけて、暗殺のしたくをはじめました。
5 その時みんなのうしろの方で、フウフウと言うひどい音が聞こえ、二つの目玉が火のように
6 光って来ました。それは例の猫大将でした。
7 「ワッ。」とねずみはみんなちりぢり四方に逃げました。
8 「逃がさんぞ。コラッ。」と猫大将はその一匹を追いかけてましたが、もうせまいすきまへずうつ
9 と深くもぐり込んでしまったので、いくら猫大将が手をのばしてもとどきませんでした。

1 猫大將は「チェッ。」と舌打ちをして戻って来ましたが、クねずみのただ一匹しばられて残っ
2 ているのを見て、びっくりして言いました。
3 「貴様はなんと言うものだ。」クねずみはもう落ち着いて答えました。
4 「クと申します。」
5 「フ、フ、そうか、なぜこんなにしているんだ。」
6 「暗殺されるためです。」
7 「フ、フ、フ。そうか。それはかあいそうだ。よしよし、おれが引き受けてやろう。おれのう
8 ちへ来い。ちようどおれのうちでは、子供が四人できて、それに家庭教師がなくて困っている
9 ところなんだ。来い。」
10 猫大將はそのそ歩きだしました。
11 クねずみはこわごわあとについて行きました。猫のおうちはどうもそれは立派なもんでした。
12 紫色の竹で編んであって中はわらや布きれでホクホクしていました。おまけにちやあんどご
13 飯を入れる道具さえあったのです。
14 そしてその中に、猫大將の子供が四人、やっと目をあいて、にやあにやあと鳴いておりまし
15 た。
16 猫大將は子供らを一つずつなめてやってから言いました。
17 「お前たちはもう学問をしないといけない。ここへ先生をたのんで来たからな。よく習うんだ
18 よ。決して先生を食べてしまったりしてはいかんぞ。」

1 子供らはよろこんでニヤニヤ笑って口々に、
2 「おとうさん、ありがとう。きつと習うよ。先生を食べてしまったりしないよ。」と言いまし
3 た。
4 クねずみはどうも思わず足がブルブルしました。
5 猫大将が言いました。
6 「教えてやってくれ。おもに算術をな。」
7 「へい。しょう、しょう、承知いたしました。」とクねずみが答えました。
8 猫大将はきげんよくニャーと鳴いてするりと向こうへ行ってしまう。
9 子供らが叫びました。
10 「先生、早く算術を教えてください。先生。早く。」
11 クねずみはさあ、これはいよいよ教えないといかんとおもいましたので、口早に言いました。
12 「一に一をたすと二です。」
13 「そうだよ。」子供らが言いました。
14 「一から一を引くとなんにもなくなります。」
15 「わかったよ。」
16 子供らが叫びました。
17 「一に一をかけると一です。」
18 「きまってるよ。」と猫の子供らが目をりと張ったまま答えました。

1 「一をいで割^わると一です。」

1 「それでいいよ。」と猫の子供らがよろこんで叫びました。そこでクねずみはすっかりのぼせてしまいました。

2 「一に二をたすと三です。」

3 「合ってるよ。」

4 「一から二を引くと……」と言おうとしてクねずみは、はっとつまってしまいました。
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
すると猫の子供らは一度に叫びました。

「一から二は引かれないよ。」

クねずみはあんまり猫の子供らがかしこいので、すっかりむしゃくしゃして、また早口に言いました。そうでしょう。クねずみは

いちばんはじめの一に一をたして二をおぼえるのに半年かかったのです。

「一に二をかけると二です。」

「そうともさ。」

「一を二で割ると……。」クねずみはまたつまってしまいました。すると猫の子供らはまた一度に声をそろえて、

「一割る二では半分だよ。」と叫びました。

クねずみはあんまり猫の子供らの賢いのがしゃくにさわって、思わず「エヘン。エヘン。エイ。エイ。」

とやりました。すると猫の子供らは、しばらくびっくりしたように、顔を見合わせていまし

1
た
が、

1 やがてみんな一度に立ちあがって、
 2 「なんだい。ねずめ、人をそねみやがったな。」と言いながらクねずみの足を一ぴきが一つづ
 3 つかじりました。
 4 クねずみは非常にあわててばたばたして、急いで「エヘン、エヘン、エイ、エイ。」とやりま
 5 したがもういけませんでした。
 6 クねずみはだんだん四方の足から食われて行って、とうとうおしまいに四ひきの子猫は、ク
 7 ねずみの胃の腑のところ頭をコツンとぶっつけました。
 8 そこへ猫大将が帰って来て、
 9 「何か習ったか。」とききました。
 10 「ねずみをとることです。」と四ひきがいっしょに答えました。

底本：「童話集 銀河鉄道の夜他十四編」 谷川徹三編、岩波文庫、岩波書店

1951 (昭和26) 年10月25日第1刷発行

1966 (昭和41) 年7月16日第18刷改版発行

2000 (平成12) 年5月25日第1刷発行

底本の親本：「宮沢賢治全集 第八卷」 筑摩書房

1956 (昭和31) 年10月

入力：のぶ

校正：鈴木厚司

2003 年8月3日作成

2008 年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、<http://www.aozora.gr.jp/>、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。